

中瀬有紀



2019年9月のニューヨーク・ファッションウィークにて発表されたコレクション  
左から Khaite, Ralph Lauren, The Row, Tory Burch

# ありふれた九月

「9月っていつも本当に大変」は装置と照明デザイナー仲間でも毎年恒例の台詞です。クリスマス休暇後の1月の仕事と同様に、9月の仕事は夏の長期休暇直後にやってくるので、チームとしての仕事開始が遅れたり、誰かがいつも抜けていてチーム全員で会議を執り行うことが難しかったり、なにかと厄介です。だからといって9月の舞台初日やイベントが延期するわけでもなく、「The show must go on.」というわけで8月の終わりごろから多くの仕事を一気に片付けることになります。毎年この時期が大変なので、自分の身を守るよう照明デザイナーとしては前もって段取りを組み、どんなに忙しくなっても全てが円滑に進むよう準備を重ねてはいるのですが、結局今年の9月も例年通りでした。

イベントと舞台の業界の外に一步出てみると、煌びやかな洋服も誰かの人生を変えるような芸術も、結局のところ何の役に立つかわからないようなものに懸命に力を注いでいる自分自身を滑稽に感じます。今年の9月も、フロリダから輸送される器材の到着が台風で遅れるとか、悪戦苦闘の末に仕上げたものが削除されるとか、様々な逆境に立ち向かう必死の奮闘も後から思えば全てが笑い話のようでした。そんな中、仕事を通じて有能な技術者との出会いは最大の喜びあり、彼らと時間を共にしたいという気持ちが明日への活力となっていることだけは確かです。

ニューヨーク・ファッション・ウィークの仕事の醍醐味は、なんといっても素晴らしいエレクトリシャンやプログラマーと仕事ができることです。もちろん、演劇の仕事で出会う技術者が劣っていると言う訳ではありません。ただ、劇場よりもはるかに時間に制限があり、勤務時間も長い上深夜と早朝の勤務もある体力的に非常に厳しい状況で、演出から大掛かりな変更を伝えられて何が何でも時間内にやり遂げるのがイ

ベント照明家の仕事です。Khaiteの現場でチーフを勤めたローラさんは、まるでお手本のような技術者でした。Khaiteの会場はブルックリンのSt. Ann's Warehouse劇場でしたので、器材の吊り位置も器材もエレクトリシャンも演劇仕様で、ファッション・ショーに対応するために器材一台ずつ、エレクトリシャン一人ずつに気を配る必要がありました。演劇と違ってファッションショーでは、会場の雰囲気づくりの上にモデルがカメラに映ることを前提に明かりが設計されるので、演劇の平均的な前明かりよりも光の入射角が比較的lowくある必要があり、劇場の固定吊り物バタンから全ての器材を一台ずつ10尺弱のパイプで吊り下ろしました。10尺弱のパイプを100台ほどの照明器材一台ずつに装着して、全てのパイプが整列して垂直に下りよう測定しながら仕込むことは、かなりの時間もしくは出際の良さを要します。またファッション業界はケーブルの処理が劇場よりもシビアです。演劇における配線はちゃんとまとまっていることを求められますが、ファッションはケーブルがほぼ隠れていることを要求されます。ローラさんはエレクトリシャン達にそれらを丁寧に説明し、最速で仕込みが成されるようチームを先導し、なおかつ皆が休憩している間も休みなく動き続けて、一日中ずっと笑顔でとても楽しそうに仕事していました。

仕事の喜びは心から尊敬できる他者との出会いと、彼らと共有する時間のように感じます。照明デザインを生業とするうえで、確かに作品やジャンルや業界の個人的な好みは捨て切れませんが、最近の仕事の種類よりも誰と一緒に働きたいかに重きを置くようになりました。現在深夜0時、明日も朝5時起床で6時現場入り、そんなありふれた9月も、有能な技術者と一緒に仕事する楽しさがあるからこそ乗り切れます。